

---

# 君に出会う冬の季節

IKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に出会う冬の季節

### 【Nコード】

N8270Y

### 【作者名】

I K A

### 【あらすじ】

季節は冬、全ての終わりが近づく。雪の季節。最後の季節に、俺は大切な出会いをする。その出会いは、今までの俺の人生を大きく変え、そして一つの奇跡を起こさせる。記憶を失い続ける少女と、記憶を失わない少年の出会い。この冬。溶けゆく雪の、溶けない記憶の物語が、始まる。『大切な記憶に、溶けない奇跡を』

## まじろ色のプロローグ（前書き）

この小説は前作『君に出会う春の季節』と同様季節シリーズ。

短い雪の恋が今、始まります。

## ましる色のプロローグ

雪が降っていた

それはいつ止むかも分からず、ただ深々と降り積もり俺たちを  
ましる色に染めてゆく。

気づくころには、俺の肩には雪が積もっていた。

白く染まる吐息。

寒い。けれど、足を止めてはいけない。

だって俺は  
けないから。

“ 約束の場所 ”

そこへ向かわないとい

傘も刺さずに、ただ深々と降り積もる雪の中を走り続ける。

まだ、間に合う筈だ。

まだ、助けられるはずだ。

まだ、奇跡を起こせるはずだ。

まだ、全てが終わった訳ではないのだから

初めて君に出会った時から、様々な感情が俺の中を駆け巡っていた。

だから、この想いを忘れたくないんだ。

この想いを、無かった事にしたくないんだ。

この　好きと言つ気持ちや、忘れたくないから。

『はあ、はあ、はあ、はあ……』

そして俺は、ましろ色に染まる道を走り続け、海岸に辿り着く。

季節外れの海は、潮の香りと、強い風が頬に当たる。

そう。この場所が、約束の場所。

俺は更に走り、“君”を探す。

まだ、君が覚えてくれているのなら　必ずここにいるはずだ。

『はあ、はあ、はあ……　そう、だよな』

そして俺が見つけたのは、一人の少女。

悲しそうな瞳に、雪のように白い肌。

弱々しいその姿は、今にも崩れてしまいそうだ。

『なんで・・・貴方は・・・』

君は、驚く様にそう言ったね。

『俺は、記憶力が良いんだって・・・言ったよな』

そう言って、徐々に君との距離を近づける。

奇跡を信じて

『雪希』

俺は、君の名前を呼んだ



溶けてゆく雪があっても、俺は

溶けない奇跡を信じて

## まじる色のプロローグ（後書き）

こんな感じのスタートです。

感想など、どしどしくださいー！

## 名もなき少女との出会い（前書き）

今回の作品の主人公は前作同様の彼ですが、彼の性格やその他が結構変わっています。

まあそのへんは読めば分かりますし、お寿司。

ではではござー！

## 名もなき少女との出会い

中学3年生、冬。

現在12月。

俺は一人、外に出ないで家でのんびりコタツにミカンを食べて過していた。

「今年も後30日ちょっとかあ」

そんな事を考えながら、クリスマスとかの予定を考える。

特に彼女もない俺にとって、この冬は夏休みと何ら変わりはない。ただ今年は中学生最後の冬と言うことで、何か行動を取ろうと考えた。

「……あそこに行ってみるか」

俺はそう言って厚着をして冬の外を歩き出す。

「うう・・・寒い・・・」

マフラーと手袋をしても、この冬の寒さはどうにもならない。

そんなことを思いながら俺が来たのは、何とこの季節にもなって海だ。

え？何で海かって？

「特に意味なんてないさ」

あ、すみません。調子に乗りすぎました。

いや、でもほんとに意味なんてないです。

海が家の近くにあるので気分で来た。

「この季節に俺みたいに海にくる奴なんていないよな・・・」

そんな事をボヤきながら、潮風吹き付ける冬の砂浜を歩く。

「・・・ん？」

だが、そこに一人の俺と同じ年くらいの少女がいた。

茶髪のサイドポニーで、胸も少しある。

青っぽい瞳は、まるで宝石の様だ。

その彼女は一人、海を眺めていた。

俺みたいな変わり者も居るんだなと少し関心しつつ、俺は一人でいる彼女に何となく声をかけてみた。

「ねえ、そこで何してるの？」

すると彼女は俺の方を向いて静かに答える。

「・・・海、見てた」

見れば分かるよ。

「何で、こんな寒い冬に？」

そう言うと彼女は疑問そうに聞き返す。

「冬に見ちゃ、悪いの？」

「いや、悪いって事は無いけどさ。海って普通は夏じゃないかなって思ったからさ」

そう言うと彼女は納得したように頷いて海を眺めながら俺に言う。

「私は、今が冬だって事・・・知らなかった」

「・・・え？」

意味が分からなかった。

冬だって事を知らない？なんで？日本人の常識じゃないか？

「どづいづことだ？」

「そのままの意味。私は、今が冬だったって事を、今知った」

「なんで・・・そんな・・・」

知らないと言うことは、学んでいないか、誰も教えてくれなかったか。

その二つのどれかだと、俺は考えた。

「君は、学校に行ったことはあるか？」

そう聞くと彼女は思い出す仕草をしてから答えた。



「分からない。あるような気がするし、無い様な気がする」

「・・・そうか」

答えが分かった。

学んでなかったんじゃない。

教えてもらえなかったわけでもない。

その時の記憶を失っているんだ。

つまり彼女は

記憶喪失。

「君、名前は？」

「名前なんてない。あっても、すぐに忘れてしまっから・・・私には、意味がない」

冷たい言葉だった気がした。

悲しい言葉だった気がした。

残酷な言葉だった気がした。

だって、形あるものには全て名前が存在する。

それは、一生背負って生きていくもの。

責任とか、罪とか、そんなものよりも長い時間付き合っていくのが名前だから。

だが彼女は違った。

名前と言う、一生を共に生きるものの存在を『意味のない』と否定したのだから。

・・・俺は、何となくこの海に来た。

その時に会ってしまったのは、苦しい病を背負った一人の少女。

記憶が無い少女に、俺は何が出来る？

答えは

一つだろう。

「だったら

俺が君に名前をあげるよ」

「え・・・」

そう。君と言う一人の少女の人生を、今からまたはじめさせれば良

い。

その始まりの場所が、この海なんだ。

君に、名前を与え、君に今から新たな人生を生きて欲しいから。

そのきっかけは、君の名前から。

「私の・・・名前を？」

「ああ。全ての始まりは、それからだ」

そう言って俺は辺りを見渡して、君に似合いそうな名前を考える。

「うん・・・それじゃ・・・」

そして俺は、君に一つの名前をさずけた。

「君の名前は

『雪希<sup>ゆき</sup>』

」

「雪希……」

そう言うと君の瞳は、まるで光がさしたように今まで以上に輝きを見せる。

希望を見つけた、その瞳。

「でも、この名前……忘れちゃう」

「大丈夫だ。俺が覚えてる、君の名前を俺は一生忘れない。絶対にな」

そう。もし君自身が忘れようとも、俺が覚えてる。

忘れたときは、また教えればいい。ただ、それだけの話なのだから。  
・  
・

「・・・絶対に、覚えててくださいね」

「もちろん。俺、記憶力には自信があるからさ！」

そう言って、俺は君の手を引く。

「あ・・・」

「そんじゃ、挨拶も終わったことだし、こんな寒い所にいないで、俺ん家に来いよ！」

そう言って俺は、雪希の手を引いて、走り出した。

『雪希』それは、例えば雪が溶けてゆくように記憶が無くなることも、決して希望を忘れてはいけなと言いう意味を込めて名付けた。



## 名もなき少女との出会い（後書き）

さてさて今回のヒロインは『雪希』です。

このキャラ、『あかね色に染まる坂』に登場します、『長瀬湊』をイメージしてみました。

まあ印象などは一切違いますので、容姿がそれとほぼ同じですと言っただけです。

ですが名前などが一切違うのでTPPに引っかからない上に自由に使えます（キリッ）

消えゆく、記憶と約束を残す物

彼女、雪希と出会って俺は毎日彼女と初めて出会ったあの海で会うようになった。

冬の寒さがありながらも、彼女に会う事は俺にとって一つの日課となっていた。

『雪希、おはよう！』

必ずその挨拶から始まる。

・・・けれど、

『・・・誰？』

君は必ず、そう言い返す。

そう、君の記憶はたった一日で全て消えるんだ。

それこそ、雪が熱で溶ける速度よりも速く。

君の記憶は、どんどん消えていく。

覚悟は出来ていた。

君は俺を忘れることは、分かっている、覚悟していた。

けれど、やっぱり忘れられるのは苦しい。

『あ、ごめん。初めましてだね。でも、俺は君の事を知ってる、知り合いだよ』

だけど、諦めきれないから、次はそう言っている。

『……ごめんなさい。私、記憶が……』

『知ってるよ。消えてくんだろ？』

『!?!?……ごめんなさい』

この会話は、毎日変わらない。

まさにD.Cだ。始まりに戻る……その通りだ。

君の記憶は、何度も何度も始まりに戻り、また全てを始まりから始めなければならぬ。

どうすれば良いのか、しばらく考えながら、君に君の名前を何度も渡した。

『君は、雪希って言うんだ』

そう言って、次の日、またこの海で君と会って同じ事の繰り返しだった。

だが、俺は一つの希望を見つける。

それは、ほんの小さなこと。

だけど、それでも、賭けてみる価値はあった。

だから俺は次の日、彼女あるプレゼントを渡した。

『……これは？』

『日記帳。ここに、今日あった事の全てを書くんだ』

そう。中学生にもなって日記帳とはどうかと思っていたが、これしか思い浮かばなかった。

『もし記憶が消えてしまうなら、どこかに残せばいい。日記には、記憶を残す事が出来るんだ』

良い記憶も、悪い記憶も、辛かった記憶も嬉しかった記憶も全て記録出来る。

『……ありがとう』

君は日記を、抱きしめるように持った。

『……今日、病院』

君はそう言い出して、歩きだした。

『病院に行く日』と『海に来る事』はしっかりと覚えているようだ。

『あ、俺も丁度今日病院なんだ。一緒に行こうぜ』

そんな嘘をついて、君と共に病院に行く。

俺は、知りたい事がある。

君が何故

記憶を失わなければいけないのか

。

病院につくと俺は彼女の関係者として病院の医務室に入る。

女性の先生は俺を見てから彼女に言う。

『あなたの彼氏さん？』

『・・・友達』

君は静かにそう答えた。

友達と言われて、素直に嬉しかった。

『そう・・・それじゃ検査を始めるわね』

そう言うので俺は医務室から出て、自販機で飲み物を飲んでた。



どんな結果が出るかなんて分からない。

けれど、最悪な事態にならないことだけ祈っていた。

その後、雪希は病室から出ていき、一人でふらりと去っていった。

俺は彼女と話しをしていた医師と話しをした。

『彼女は……どうして記憶が消えて行くんですか？』

単刀直入にそう聞いた。

何よりも知りたかった、彼女の真実。

『・・・それは、興味本位で聞いていい話しではありません  
ん』

先生はそう言った。

確かに、彼女自身の事を聞くのは、興味本位のレベルで聞くことじゃない。

・・・でも、

『俺は興味本位で聞こうなんて考えていません』

そう、興味本位で君の真実に触れるつもりはない。

ただ、寂しそうだったんだ。

冬の海をたった一人で見つめている姿は、見ていられなかった。

何も無い、空っぽの少女。

君を見た瞬間、俺の中で色々な何かが変わったんだ。

失われゆくものが目の前にあって、手を伸ばせば救えるかもしれない。

手を伸ばさなかったら、一生後悔するって思った。

だから俺は君に手を伸ばした。

『俺は、彼女の忘れていったものを、全て覚えてあげたい。俺が彼女の記憶になってあげたい。俺にとって雪希は・・・大切な存在だから』

『・・・彼女に、雪希って名付けたのは・・・あなただったのね』

『え？』

先生はそう言って、全てを話してくれた。

『彼女は生まれつき記憶の容量に限界があったの』

『記憶の容量?』

『パソコンに入るデータの量が決められている様に、人間にも入る情報の量は決まっている。まあその容量はPCよりも遙かに多いけどね』

そう言っつて先生は俺を見つめて話し出す。

『けれど彼女は、その容量が極端に少ないの。だから脳は超えた分の記憶を削除して行つてるの』

『・・・』

俺はもはや驚きもしないで絶句した。

それだけ俺は、君の真実にショックを受けたんだ。

君の真実は、やっぱり重い。

『それで、その容量つて何年分の記憶に相当するんですか?』

『現在の彼女の年齢は15歳。そして覚えているのは13歳まで』

二年分・・・730日分の記憶が容量オーバーで消えていつている。

『彼女の脳は、崩壊させないために覚えた事を睡眠と言つ時間の中で消去していつてるの』

じゃ、覚えてもらえないと扱われて消去されていく……のか。

『……けど、最近彼女はある事を必ず覚えているの』

『え……』

『……』雪希『って単語。きっと名前なのだろうけど、これは彼女の本当の名前じゃないわ。なのに彼女は雪希と言う単語を覚えて……忘れなかった』

雪希……か。

『どうしてなんですか？』

『これは私の予想だけれど、彼女自身の覚えている記憶と言うデータの中で不必要な記憶を削除して、現在の中でもっとも必要な記憶を保存させたんじゃないかと思うわ』

それだけ、雪希と言う名前は大切なのか……

『彼女の話はここまで。その他の記憶は、彼女……雪希さんから聞いて』

『はい。ありがとうございました』

『いいえ。あなたは、彼女を救ってあげられる。だから、いつでも助けてあげる』

『・・・はい』

そう言って俺は、家に帰った。

雪希 Side

『・・・』

私は一人、部屋で彼から貰った日記を見つめていた。

ここに書けば、忘れても・・・残る。

私と言う存在を・・・残せる。

『タイトルは何にしよう?』

そう思いながら、ペンを持つ。

そして私は、何となく思いついたタイトルを書いた。

『新装版の記録』



私が雪希と言つた名前になつた事から始まる。

この日記は、雪希と言つた名前の私が書くから、私の日記。

そして私は1頁目につづ書いた。

初日。

私は、私の記憶を残して、覚えてくれる人ができました。

そしてその人は、私に名前をくれました。

この日記に、私は約束と記憶を書きます。

これで　　忘れないはずだから。

それが恋と気づくまで（前書き）

この小説、案外内容を考えるのが難しい（――）

とにかく皆さんの感想が欲しいです。

よろしく願います。

それが恋と気づくまで

彼女、雪希と出会っては数週間。

俺達はいつもの海で待ち合わせし、海で会ったら街に出たりした。

それは、日記に書くことが増えてくれれば良いなって思ったからだ。

そして現在、12月23日。

明日はクリスマスイヴ。

中学生最後のクリスマスが近づいている。

『なあ？明日さ、俺の家に泊まらないか？クリスマスパーティーでもやらない？』

俺はそう言つと、君は少し考えて頷いた。

『よし。それじゃ明日、またここに集合な？』

そう言つて俺たちは約束して共に帰宅する。

家に帰ると、俺は自分の部屋を見渡した。

『少し汚いか・・・』

明日は女が来るのだから綺麗にしないと。

そう思った俺は部屋の掃除を真剣に行なった。

・・・てか、どうしてこんなにワクワクしてるだろ？

むしろ部屋みて嫌われないか不安がるべきだと思うが・・・

でも・・・やっぱり心のどこかで、雪希が来てくれることを嬉しいと思う。

まあ初めての女友達だしな。

そして今回のクリスマスで、彼女が心の底から笑顔になれば良いなって、俺は思う。

そのためには、色々頑張らないとな。

そしていつの間にか彼女の事を考えながら、掃除は夜まで行われた。

雪希 Side

『・・・』

家に帰った私は、日記に今日彼に言われた事を書いた。

明日のクリスマスイヴと一緒に過ごすと言っもの。

一体どんなクリスマスイヴになるのか、とても楽しみ。

・・・あれ？

どうして楽しみなんだろう？

ただ一日過ごすだけなのに、どうして心臓がドキドキするのか分からない。

この、嬉しいような、ちょっと苦しいような感覚は・・・何だろう？

でも・・・嫌いじゃない、この感覚。

明日が・・・楽しみだな。

『早く、明日にならないかな・・・』

そう言って、冬の夜空を見上げる。

『あ・・・雪』

空を見上げると、雪が舞い散っていた。

『綺麗・・・あの人も、見てるかな・・・』



俺は掃除を終え、夜空を見上げた。

『お、雪だ』

残り少ない今年に降った雪は、美しく・・・そして儚く見える。

どんなに降り積もっても、いつかは溶けて消えてしまう。

『・・・出来れば、明日の一日のことは、忘れないで欲しいな・・・』

それは、叶わない願い。

だけど、諦めきれないから。

俺はただ、奇跡を願っている。

きっと今も消えゆく記憶に苦しんでいる彼女を・・・助けたいから。

『この雪・・・君も見てるかな・・・』

そして、翌日　この日、12月24日は俺たちにとって、  
ても大切な一日になる。

## 壊れゆく冬

俺はいつものように約束の海に向かう。

『雪希、おはよう』

『おはよう』

そう言って挨拶を終えると、俺と雪希は歩きだし、俺の家に向かう。

『・・・』

『・・・』

俺の家に着くまで終始無言の状態で歩いていた。

俺と雪希は互いに1m近く距離をとって歩く。

なんとも言えない空気が、どこか好きだった。

雪希は恥ずかしそうに俯きながら歩いている。

その姿を見ると、俺の心臓の鼓動は加速した。

でも、そんな時間でさえ、充実した感じだった。

『あ／／／』

途中、俺と雪希の手が触れた。

『じ、ごめん・・・』

『いや・・・その・・・』

なんとも気まずい雰囲気になってしまった。

ただ手が触れた瞬間、凄くドキツとした。

君の呼吸が少し荒く、顔が赤い。

きっと恥ずかしかったのだろう。

まあ俺もだが・・・

『つ、着いたぞ』

そう言って俺と雪希は家に入った。

家に入っても雪希はそわそわとしていて、どこか落ち着けていない  
感じだった。

それはまた俺も同じ気持ちなので、何か話題はないかと探していた  
が見つからないので取り敢えずテレビを付けた。

だがテレビで放送されているのはクリスマス特集ばかり。

特に話題になることはないか？

『・・・ねえ?』

君は俺を呼んで、言う。

『クリスマスって・・・何をするの?』

その質問に、俺は答える。

『神の子が人となって生まれて来た事を祝う為だと言われているらしいけど、まあお祝い事だっということだよ』

結構前に調べたので覚えていた事をいった。

『・・・』

それを聞いた君は日記にその単語をメモした。

正直、中身が気になる。

何が書いてあるのか?

気にはなるけど、聞くのは失礼だし、勝手に見るのはもっと失礼だ。

そして書き終えた君は日記を閉じて、抱きしめてつぶやいた。

『これで・・・忘れない』

『・・・』

俺はその姿に、心を奪われた。

まるで童話の中に存在するヒロインだ。

願いながら、抱きしめる記憶。

その姿を見ている自分は、童話の世界にいる気分だった。

『？どうかしたの？』

『あ・・・いや、何でもない』

『・・・そっ』



それからしばらくの間、沈黙が俺と君の間にあった。

けれどその時間でも俺は、何も辛くなかった。

むしろ俺は、速く時が過ぎないかとドキドキしていた。

もうすぐ、クリスマスが訪れるから。

現在、12月24日 23時59分。

あと60秒で、俺と君が初めて共ににするクリスマスがやってくる。

『もうすぐだな、雪希……って』

『すう……う……ふみゆ……』

君はこたつに入ったまま、テーブルの上で腕を枕にして眠っていた。

『……はは、まあ眠よな』

そう言っつて俺は毛布を出して君の肩にかけてあげた。

『……さて、あと30秒』

時計の針が動いていく。

その音が聞こえる度に、俺の心臓の鼓動は増していく。

君の隣で迎えるクリスマス。

今年は、幸せなクリスマスになるんだろうな。

そして  
時計の針は12を超え、日付は変わり、12月25日  
クリスマスとなった。

『…………ん』

『お、雪希。起きたか？』

『…………！？』

君は目を覚ますと、飛び跳ねる様にして立ち上がり、怒りの表情で俺を見る。

『あなた　　誰！？』

『なっ！？』

君は俺に向かって、怒鳴りながらそう言った。

『どこどこ！？もしかしてあなたの家！？』

『おい……雪希…………』

『雪希！？誰それ！？私は……………っ』

君はそこから、頭を両手で抑え始めた。

『私は…………わた…………私は…………』

突如震え、怖がっていた。

『ゆ・・・雪希』

俺は恐る恐る手を伸ばす。

『触るな!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

『っ!?!?』

だが君は俺の手を、叩いた。

その後、自分のした事に後悔したのか、俺に恐る恐る言った。

『ご・・・ごめん・・・なさい・・・』

『大丈夫。雪希、どうしたんだ?』

『雪希・・・誰・・・誰の名前・・・なの?』

『っ・・・』

分かった。

何故雪希が暴走したのか。

再び、記憶を全て失ったんだ

『じゅ、じゅめん・・・なさい・・・私・・・私!!!』

『!』

そう言って君は走って俺の家から飛び出した。

『お、おい!!!!!』

俺は立ち上がって追いかけてよとした。

『ぐっ・・・』

だけど、足が動かない。

まるで、重りが足にかかったように。

前に進まない。

走れば、追いつくことが出来る筈なのに、俺は進まない。

いや、進めないんだ。

むしろ、俺の両足は、震えていた。



『触るな!!!!!!!!!!!!!!』

その言葉が、俺の頭を駆け巡る。

叩かれた手は、赤く腫れて、未だヒリヒリと痛んだ。

凄く・・怖い。

歩く事が・・・足を進めることが、怖いんだ。

『・・・雪希・・・』

俺の呼ぶ声は、静かに

消えていった。

ただ残されたのは、君が残した

日記だけだった。

残された5ページと・・・(前書き)

この小説の主人公を新オリキャラにするか朝我で行くか迷いましたが、新オリキャラにすることが決定しました!!!

残された5ページと・・・

『・・・』

俺は一人、君が置いていった日記の表紙に触れる。

使い込んだ跡、爪跡や指紋が残っていて、毎日使っているのがよくわかる。

勝手に読むではいけないの分かっている。

けれど、今の俺は・・・知らないといけない気がした。

君が今まで、何を残していったのかを。

君が今日まで、何を記録して・・・何を大切にしてきたのか。

そして俺は、最初の一頁を開いた。











その日の事は、俺も覚えてる。

貝殻を探している最中、ぼーっと俺の事を見る君に声をかけると、君は突然慌てたんだよね。

俺もビツクリした。

君が急に驚いてあたふたしていたのだから。

初めて見た見た行動に驚いたけど、それと同時に君のその姿を見れた事が凄く嬉しかった。

そんなことも思いだしながら、再びページをめくる。



けれど、少なくとも私の日記には必ず存在するほど大切な人なのだろう。

『この感情の正体、教えてあげる』

そうやって先生は私の胸にそっと触れて言った。

『それはね？ “好き” って感情で、“恋” ともいうの』

恋・・・好き・・・

よく学生がする恋愛と言うものを、私もしているのかな？

この事を聞いた瞬間、私の心臓の鼓動は早くなった。

そして心のどこかで納得したような感覚。

これは・・・先生の言った事が正しいと、私の心が証明しているのだと思った。

この気持ちを、これからも大切に先生に言われたから、日記に記録した。









『あれ・・・』

ここで次のページをめくるがその先には何も書かれない。

『たった・・・5ページ』

それだけの記憶・・・なのか・・・

俺は、彼女に5ページ分の記憶しか用意できなかったのか!?

そのことへの後悔を残しながら、俺は最後のページ。

昨日の日記を見た。



そして彼の家に着くと、私はソワソワしながら、コタツに入る。

会話が無かったけど、そんな時間でも幸せだった。

大好きな人の傍にいる。

そのことが嬉しくて、幸せで・・・忘れなくなかった。

・・・けれど、きっと忘れてしまうのだろう。

どんなに大切な記憶も、消えてしまう。

私の記憶は、『雪』なのだ。

どれだけ降り積もっても、最後は溶けて消えてしまう。

どんな寒い場所にあっても、長くは続かない。

私は・・・彼の傍にいていいのかな・・・

雪わたしがあっても、溶けて消えてしまう存在は、最初から存在しないほうがよかったのではないか？

私は・・・彼の事が好きだ。

けれど、この想いを伝えることができない。

だって、忘れてしまうから。

忘れたくない・・・けれど、消えてしまつのなら、何もしいほ  
うがよかったのだ。

だから私は次に目覚めたとき、彼の傍から離れよう。

そのことだけは、絶対に忘れないようにする。

・・・ちよつなら。





私は、記憶を失っていなかった。

むしろ、彼と出会った日の事も全て覚えていた。

朝早く目覚めると、私は今日何があるか覚えていた。

だから、ここには覚えていて、今の想いを書いてみることにした。

『私は、土屋和宏君の事が

好きです』

『初めて出会ったあの日、私は私の代わりに覚えてくれる存在に出会えて嬉しかった。その出会いを、これからも大切にしていきたいと思って、今日まで大切にしてきました』

『<sup>かず</sup>和君。もし、この日記を読んでいたら私のお願い、聞いてくれますか？』









『  
・  
・  
・  
』

俺は日記を閉じて、家を飛び出す。

『護ってるよ、この記憶だけは  
』.....『

絶対に!!!!!!

雪希が覚えてくれた俺は、彼女の全てを取り戻しに向かう。

雪が降り積もる、12月25日に。

溶ける雪に溶けない奇跡を・・・

雪が降っていた

それはいつ止むかも分からず、ただ深々と降り積もり俺たちを  
ましる色に染めてゆく。

気づくころには、俺の肩には雪が積もっていた。

白く染まる吐息。

寒い。けれど、足を止めてはいけない。

だって俺は  
けないから。

“ 約束の場所 ”

そこへ向かわないとい

傘も刺さずに、ただ深々と降り積もる雪の中を走り続ける。

まだ、間に合う筈だ。

まだ、助けられるはずだ。

まだ、奇跡を起こせるはずだ。

まだ、全てが終わった訳ではないのだから

初めて君に出会った時から、様々な感情が俺の中を駆け巡っていた。

だから、この想いを忘れたくないんだ。

この想いを、無かった事にしたくないんだ。

この　好きと言つ気持ちいを、忘れたくないから。



『はあ、はあ、はあ、はあ……』

そして俺は、ましろ色に染まる道を走り続け、海岸に辿り着く。

季節外れの海は、潮の香りと、強い風が頬に当たる。

そう。この場所が、約束の場所。

俺は更に走り、“君”を探す。

まだ、君が覚えてくれているのなら　必ずここにいるはずだ。

『はあ、はあ、はあ……　　そう、だよな』

そして俺が見つけたのは、一人の少女。

悲しそうな瞳に、雪のように白い肌。

弱々しいその姿は、今にも崩れてしまいそうだ。

『なんで・・・貴方は・・・』

君は、驚く様にそう言ったね。

『俺は、記憶力が良いんだって・・・言ったよな』

そう言って、徐々に君との距離を近づける。

奇跡を信じて



『あなた・・・誰・・・』

『嘘つくな。本当は、全て覚えてるんだろ？』

『っ・・・』

そう言うと君は下唇を噛みながら、言った。

『覚えてない・・・忘れた』

『嘘だな。雪希、お前は何も失ってなんかいない！！！！』

『違う・・・最初から、最初から、何も得て無いだけ！！！！  
！！！！本当は！！！！！！！！！！私には何も無かったの！！！！！！！！！！』

そう言って君は地面に落ちている大きめな石を拾って、俺に投げつける。

『っ！！』

投げた石は俺の右肩に当たり、俺は抑える。

『最初から、最初から私は何も無かったの！！！！！！！！必要無かったの！！！！！！！！だから、だから！！！！！！！！』

『何もかも、無かった事にしようってか！？』

『っ！』

俺は君の言葉を言い終える前に答えを言った。

『それは大きな間違いだ雪希！！雪希は何も失ってないし、これからも失わないよ』

『嘘だ！！！！！！！！私は・・・私は何も・・・何もかも！』

！！！！！！！！』

『何も失わない！俺が失わせない！！！！絶対に！！！！！！』

『！』

そう言って俺は君のもとへ、歩きだす。

『やめて……近づかないで!……!……!』

そう言って君は近づく俺に次々と石を投げてくる。

『うっ……ぐ……あっ……』

石は容赦なく俺の体の至る部分に直撃し、至る部分が赤く腫れ上がる。

それでも俺は、歩みを止めない。

絶対に……止まらない。

『駄目……近づかない……で……来ないで……  
来ないでよお!……!……!』

そう言いながら君は我武者羅に石を投げつける。



『確かに、雪は溶けて消える。けれど、それが雪のあるべき姿だ。春は桜の花が散って、夏には緑色の葉が彩り、秋には紅葉が舞い散る。そして　　雪の季節になるんだ。それぞれ存在するから価値があるんだ!!!無かった事になんて、絶対に出来ない!!!!!!』

そう言って、更に歩みを進める。



『雪希と出会った事を、無かった事にする事は出来ない  
！！雪希の存在を、否定することもできない！！！！』

俺が歩みを止めないのは、雪希を助けたいから・・・だけじゃない。

奇跡を願っている・・・だけじゃない。

『あゆむ・・・聖夜』

た  
だ  
・  
・  
・  
・

ただ  
・  
・  
・  
・  
・

俺  
・  
・  
・

『雪希の事』

』

君に

『雪希の事が、好きなんだ』

君に、笑顔になって欲しいんだ。



『え……嘘……』

俺は君の目の前にたどり着き、君の左頬に右手を当てる。

『本当だよ。俺は、雪希の事……大好きだよ』

そう言って俺は、君の唇に俺の唇を重ねた。

『んむっ／＼／＼／＼／』

10秒ほど数えて離すと、君の瞳は涙を流しながら潤って、真っ直ぐに俺を見つめていた。

『これでも・・・わからないか？伝わらないか？』

『ううん／＼／＼伝わった・・・よ』

そう言っつて君は俺に抱きつく。

身長的に俺の方が上だから、自然と君の顔は俺の胸に埋まる。

俺は抵抗することなく、君を抱きしめ返す。

『嬉しい・・・凄く、嬉しいよ』

『雪希・・・』

そして君は、真実を話した。

『ごめんなさい。私、和君と過ごした記憶だけは・・・何一つとして忘れてないの』

『・・・』

『最初は、ビックリしたの。どんな記憶でも忘れるはずなのに、和君と過ごした記憶だけが何故か残ってるの』

そうだったんだ・・・けれど、どうして日記には・・・

『でもね？いつか忘れれると思ったの。だから日記に、  
記録  
したの。そして予想通り、何度か記憶を失った』

だけど、度々その記憶は元に戻っていた……ってわけか。

『怖かった……私は、和君の事が大好き。でも、忘れちゃう……忘れたくないのに……私の記憶から、和君が消えちゃう……それが……嫌だったの……!!!!』

悲痛な叫びを聞いた俺は、君を抱きしめる力を強める。

『……和君……』

『大丈夫。雪希の記憶は、俺が死んでも護るから』

そう……約束したのだから。

『うん……うん……!!!!』

そして時は経ち、朝日が差し込んだ時

俺と雪希の影は

一つに重なった。

初めて出会った

雪が降る海で。

**最終回 ましろ色の初恋（前書き）**

時は流れ、翌年の冬。

1年と言つ時が経つて、二人に大きな変化が・・・

## 最終回 ましろ色の初恋

1年後。

中学を卒業した俺は、高校受験に合格して現在は高校1年生としての日々を送っている。

成績は良い方とは言えないけれど、楽しくやっている。

まあ先生からちゃんと勉強しろとかよく怒られるのだが・・・無視。

学校が終われば俺はすぐにある場所に向かう。

土屋「お〜い！雪希！！！」

茶髪のサイドポニーの髪をした少女の後ろ姿。

彼女は、俺の大切な人で、彼女だ。

雪希「あ、和君！！！」

女子高の制服を着た君は俺の声に反応して振り返る。

青っぽい瞳が俺を見つめてくる。

俺はそれを笑顔で見つめ返す。

そしてお互いに歩みを進め、傍に近づくと君は俺の右腕に抱きつく。

土屋「うを！？」

雪希「えへへ／／／／お疲れ様／／／／」



土屋「あ、ああ。お疲れ」

そう言って俺と雪希は一緒に歩き出す。

1年前に起こった奇跡は、今も続いている。

雪希は、俺との記憶を忘れる事は無く、今もなお、俺との記憶のみ

覚えている。

病院の人からは、こう説明された。

『きつと、今までの全ての記憶を捨てても、あなたとの記憶を覚えていたかったんだと思うわ。でも覚えられるのはきつと、あなたとの記憶だけ……』

つまり雪希は俺との記憶以外は覚えられない。

それは、俺との記憶を、これから先覚えていくであろう全ての思い出よりも優先した結果なのだろう。

雪希「どうかしたの？」

土屋「いや……。これからデートでもするか？」

雪希「うん……!?!?!?!?!」

そう言っつて俺と雪希は、真冬の商店街を歩きだす。

クリスマスと言っつこともあり、クリスマス用にライトアップされている。

周りはカップルで染まっている。

俺たちもその中に混ざっていると思っつと、すごく嬉しい。

雪希「ねえ和君」

土屋「ん？」

雪希「あのね／＼／＼その／＼／＼」

土屋「？」

突然、君はもじもじしだして、鞆の中をゴソゴソとあさって、中の物を取り出す。

雪希「これ／＼／＼クリスマスプレゼント／＼／＼」

土屋「あ……ありがとう。開けても良いか？」

雪希「う、うん／＼／＼」

初めて貰う、雪希からのプレゼント。

俺はそれを開けた。

土屋「これ……」

それは、俺と雪希が初めて出会った海で、初めて見つけた貝殻を使  
って作られた指輪だった。

雪希「えへへ／＼／＼頑張って作ったんだ。気に入った？」

土屋「……あはは」

雪希「？」

俺は指輪を左手薬指につけた。

指輪は俺の薬指とピッタリのサイズに入って輝いた。

そして俺は空いてる左手で左ポケットに入れてあった小さな箱を雪  
希に渡す。

土屋「これ……クリスマスプレゼント」

雪希「つ／＼／＼／＼あ、あり、ありがとう／＼／＼あ、開けても良  
いかな？」

土屋「うん」

そう言って雪希も、俺のプレゼントを開けた。

雪希「え……」

そこに入っていたのは、雪希と同じように、貝殻を使った指輪だった。

土屋「俺達が初めて出会った時に見つけた貝殻を使って指輪、俺も作っただ」

だから、それが面白くて笑ってしまった。

お互いに考えることは同じだなって思ったから。

雪希「こ、これ／＼／＼／＼」

土屋「？」

雪希は俺があげた指輪を俺に渡して言う。

雪希「和君に・・・付けてもらいたいな」

土屋「っ・・・」

それは、まるで結婚式をしている感じだった。

土屋「・・・良いよ」

そうやって俺は雪希の左手を取って、薬指にゆっくりと・・・指輪をつけた。

雪希「え、えへへ／＼／＼／＼／＼／＼」



土屋「・・・」

俺と雪希はハニカミながらも見つめ合い、唇を重ねる。

雪希「私、和君のお嫁さんだね」

土屋「そつだな。雪希は俺の嫁で、俺は雪希の婿だ」

雪希「っ／＼／＼うん！！！！」

そつ言つて雪希は俺に抱きつき、頬にkissをした。

土屋「っ・・・雪希」

雪希「これからも・・・ずっと一緒だよ。あ・な・た」

土屋「勿論。一生

忘れない。一生

」

俺は、雪が降る空に向けて、そして

雪祭に誓う。

土屋「一生

傍にいてやるよ」

二人の空に舞い散る雪は、いつまでも二人に降り積もり  
けてゆくことは無いだろう。

溶

溶ける雪に

溶けない魔法がかかったときは、永遠に続く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8270y/>

---

君に出会う冬の季節

2011年12月5日00時48分発行